

学習の困難さに関する家庭の文化的背景という観点からの検討

—中学校数学科の授業における生徒間の関わりに着目して—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 麻生真緒

1. 問題と目的

まず、主題にある文化的背景だが、これは家庭内で子どもに対して行われる文化的行為がどのように行われたかという背景のことである。例えば、小さい時に家の人に絵本を読んでもらった、子どもの勉強を見る、子どもと一緒にニュースを見るといったことが挙げられる。また、こうした家庭内で子どもに対して行われる文化的な行為がどの程度行われたかを階層化したものが文化的階層である。文化的階層は養育者の経済的地位と関連する。しかし、経済的に苦しくても子どもに文化的な行為を行っている養育者はいるため、必ずしもそれのみで説明できるものではない。

先行研究では、刈谷 (2008) により、文化的階層が高いほど学習意欲、学習行動、学力が高いということが示されている。(表 1)

表 1 文化的階層と学習意欲、学習行動の関係

		上位	中位	下位
学 習	出された宿題	71.7	67.2	55.9
	はきちんとやる	%	%	%
意 欲	勉強は将来	77.1	62.3	57.0
	役に立つ	%	%	%
学 習	家庭学習を	31.4	42.9	57.5
	しない	%	%	%
行 動	家庭での	38.9	27.3	20.7
	平均学習時間	分	分	分

このような文化的階層による教育格差は、子ども達自身の行動や努力のみでは解決することができない問題である。このことに対し、福祉として介入したりと様々な手法があるが、教育に絞って考えると、その地域の子ども達

が多く集い、共に学ぶ学校という場で何かできることはないだろうかと考えた。

昨年度の筆者の研究 (麻生, 2020) でも、同じ問題意識の元、文化的階層を中心とした研究を行った。その結果、下記の①ができ、その際に②のような環境がある場合、文化的背景得点及び学習意欲得点は低くとも授業への参加度は高かった。

- ① わからない問題があった時に他者（この場合は近くの友達）に聞くことができる

② 聞かれた生徒は、その質問に快く応じている

よって、生徒が学習に向かう第一歩として他者（教師、クラスメイト）との関係が大切になることが明らかとなった。この他者との関係について、社会関係資本として志水 (2008) により先行研究が行われている。子どもの社会関係資本について、以下の 4 つが言われている。

1. 保護者の文化資本及び社会関係資本との関係が強い
2. 経済資本の間には関連が見られない
3. 社会関係資本は学力に対して正の効果をもっている
4. 仲間との良好な関係が学力の下支えに重要な要素である

以上のことから本研究では、文化的背景により、授業にうまく向かえないなど学習行動に影響を受けていると思われる生徒に対し、昨年度の研究で明らかとなった授業内の他者（生徒、教師）との関わり合いに着目し、生徒

が学習に向かうための助けとなるような手立ては何かを検討することを目的とする。

2. 研究の方法と内容

2.1. 期間及び対象生徒

期間	令和2年6月～11月
対象	山梨県内公立中学校（連携協力校） 2年生3学級96名（男子59名、女子37名）

2.2. 研究方法

本研究では、数学の授業内における参与観察とアンケート調査の2つの観点から検討を行なった。

2.3. 参与観察

6月から11月までの期間、2年生の3学級にて、数学の授業内での参与観察を週に一回行なった。また、教科担任等からの聞き取りを通し、生徒理解を行なった。

2.4. アンケート調査

アンケートは9月に、授業を観察している2年生の3学級に対して行なった。実施人数は90人、うち無回答のない有効なデータは87であった。

アンケート項目は主に、東大関西調査(荻谷ら2002)、全国学力・学習状況調査を参考に作成し、以下の3つの内容を中心とした。

- | |
|------------------|
| ① 学習意欲、学習行動について |
| ② 学習の際の他者との関わり |
| ③ 家庭の文化的背景に関する項目 |

アンケート調査を行なった理由は2つある。一つ目は、担任等からの聞き取りの情報をさらに深化させ、生徒理解を行うためである。二つ目は、観察を行うターゲット生徒を絞る際の参考にするためである。ターゲット生徒は、参与観察による普段の授業の様子と、アンケート調査による家庭内での家族との関わりや、学習への意識や取り組みなど、学校内での生徒との関わりだけではわからない情報と共に、

総合的に抽出を行なった。

2.4.(1) 学習意欲、学習行動に関する項目について

質問項目は表2の通りであり、4件法で合計16点である。

表2 学習意欲、学習行動に関する項目	
学習意欲、学習行動について	
1.	あなたは平日、家で平均どれくらい勉強しますか？
2.	あなたは出された宿題に対して取り組んでいますか？
3.	家の人に言われなくても、自ら進んで家庭学習をしていますか？
4.	勉強することは将来役に立つと思いますか？

2.4.(2) 学習の際の他者との関わりに関する項目について

質問項目は表3の通りであり、1、2は4件法、3は8つの選択肢から、4は7つの選択肢から複数選択する形となっており、これら全てを点数化すると合計12点となる。

表3 学習意欲、学習行動に関する項目	
学習の際の他者との関わりについて	
1.	授業中、自分の考えを発表したり近くの人に説明する時、自分なりに相手にうまく伝えようとしていますか？
2.	授業中、他の人が考えを発表したり自分に説明してくれている時、理解しようと意識して相手の発表を聞いていますか？
3.	授業中、わからないことがあったら、普段どうしていますか？
4.	家で勉強している時、わからないことがあったら、普段どうしていますか？

2.4.(3) 家庭の文化的背景に関する項目について

質問項目は表4の通りである。1～6はその事実があったかどうか、7は程度を4件法で、8は冊数を4つの選択肢から選択し、これら全

てを点数化すると合計 12 点となる。

表 4 家庭の文化的背景に関する項目

家庭の文化的背景に関する項目について	
1. 家にパソコンがある	
2. 調べ学習の際、家族に尋ねたり一緒に調べることがある	
3. 小さい頃、家族による本の読み聞かせがあった	
4. 小さい頃図書館で本を家族と一緒に選んで借りた	
5. 塾に通っている	
6. 学校行事以外で、美術館や博物館、科学館を訪れたことがある	
7. 家族とニュースや新聞を見る機会がある	

3. 結果と考察

3.1. 参与観察から（学級全体）

3 学級ともクラス内の雰囲気は良く、授業中もほとんどの生徒が熱心に取り組んでいた。教師の発言、問いかけに対しての反応もとても良く、例えば提示された問題が困難で、教師がヒントを出すことを生徒に提案した際には、自分達でまだ考えたいから待ってくださいと頼むような場面もあった。このように、生徒達が意欲的に授業に取り組んでいる様子を見ることができた。しかしその中でも、基礎的な知識が追いついておらず、授業についていけない生徒が数人いた。

教師は、解答を板書させる際には出席番号で当てることを主にしていた。解答することが難しい生徒に当たった際には、その生徒自ら近くの生徒に聞きに行き、何としてでも板書を埋めようとしている姿を見ることができた。また、難しい問題の場合は、教師が解答生徒を 1 つの問題に二人指名し、二人で相談して解くようにと指示することもあった。このように、解答の指名にも教師の配慮が行き届いた授業が展開されていた。

3.2. アンケート調査の結果から

アンケート調査の結果を元に、文化的階層に関わる項目を点数化し、それを合計した値が～7 点を下位、8～10 点を中位、11 点～を上位の 3 つのグループに分け、グループによってどのような違いがあるかを調べた。人数の内訳は表 5 の通りである。

表 5 文化的階層とグループごとの内訳

文化的階層	下位	中位	上位
	12 人	49 人	26 人

文化的階層と学習意欲、学びの際の他者との関わり、平日の家庭での平均勉強時間は、表 6 より、どの項目群でも下位層より上位層の方が得点が高いという結果となった。

表 6 文化的階層とそれぞれの項目群の結果

	下位	中位	上位
学習意欲	12.1 点 (5～16)	13.4 点 (9～16)	14.2 点 (12～16)
学びの際の他者との関わり	8.6 点 (6～11)	9.1 点 (6～12)	10.3 点 (7～12)
家庭での平均勉強時間	109 分	128 分	132 分

※ () 内は点数の幅

しかし、それぞれの点数の幅を見てみると、学習意欲は階層による点数の幅の差が大きいのにに対して、学びの際の他者との関わりについては、階層による点数の幅の差があまりないことがわかった。このことから、学習意欲は文化的階層が上位だと著しく低くなることはないが、学習の際の他者との関わりについては文化的階層に関係なく苦手な生徒が存在することがわかった。

次に、授業中にわからないことがあったら普段どうしているかについては、図 1 の結果となった。複数回答があるため、合計割合は 100%を超えている。図 1 から、授業中わからない問題があった際にそのままにしておくと答えた割合が、文化的階層が上位の層は 0%なのに対して、下位の層は 20%以上がはいと答えている。また、「授業後先生に聞く」「家で家族に聞く」の項目に関しても、文化的階層が中

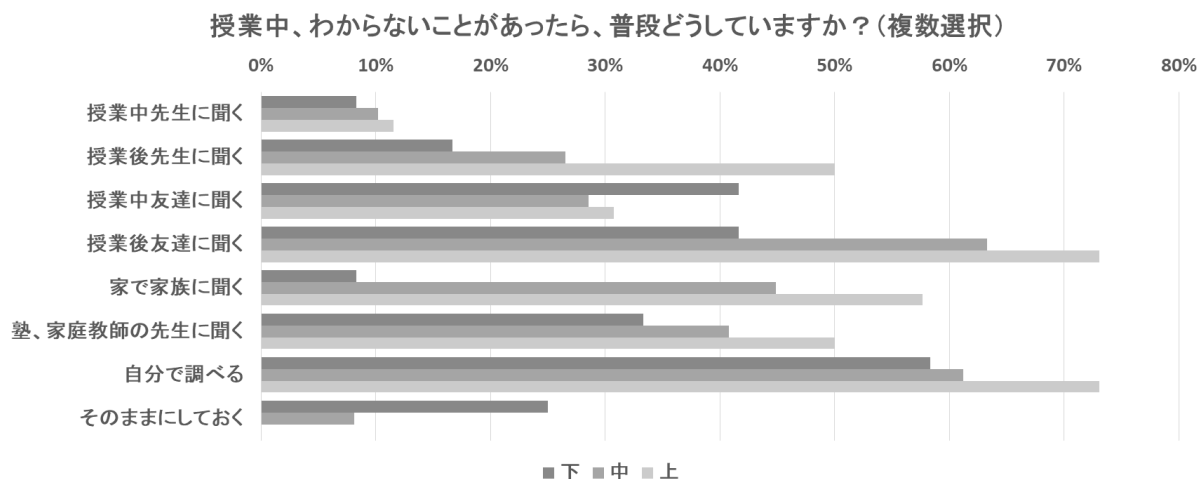


図1 文化的階層と授業中にわからない問題があった際の行動

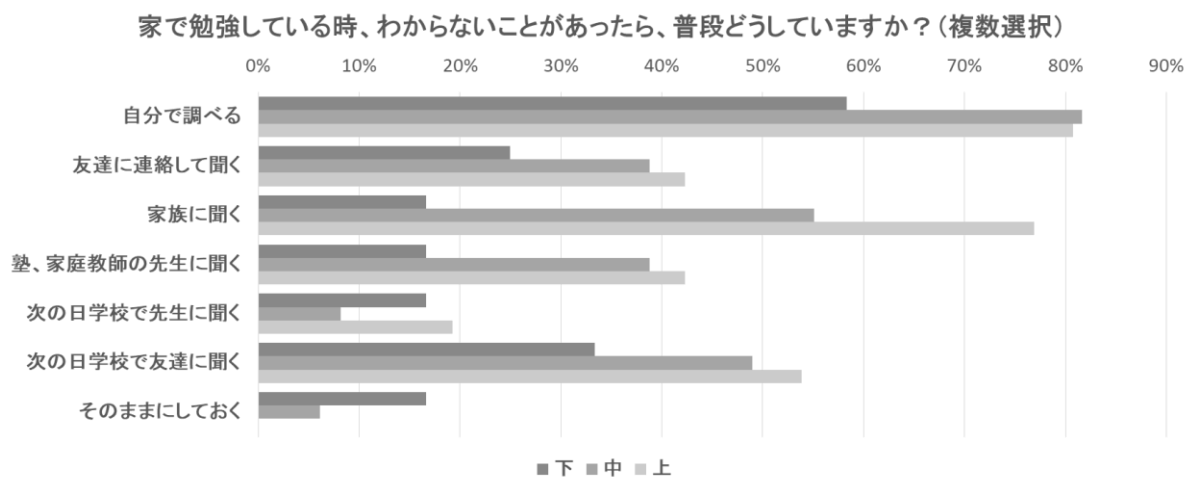


図2 文化的階層と家庭学習中にわからない問題があった際の行動

位、上位の層と比べて下位の層ははいと答えた割合が低かった。しかし、授業中に友達に聞くという項目に関しては、はいと答えた割合が文化的階層が下位の層が一番多いという結果となった。しかし、授業観察を通して、授業中にわからない問題について話し合っている生徒について階層による差は見なかった。

次に、家で勉強している際にわからないことがあったらどうするかについては、図2の結果となった。こちらも複数回答のため合計割合が100%を超えている。図2から、図1と同じように、わからない問題があった際にそのままにしておくと回答した割合は文化的階層が下位の層が中位、上位の層と比べて高かった。また、家で勉強していても、わからない問題があった際に家族に聞くと答えた割合が

文化的階層が下位の生徒は20%以下であり、中位、上位と比べてかなり低いという結果となった。

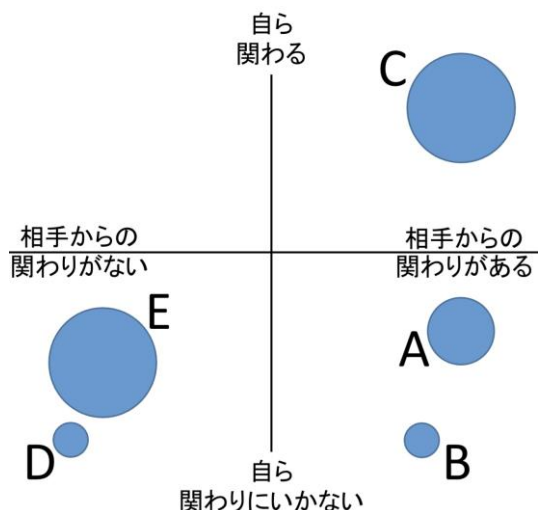
図1、図2より、文化的階層が下位の層はわからない問題に対して自ら行動を起こす割合が中位、上位層に比べて全体的に低い特徴があることがわかった。

3.3. 参与観察とアンケート調査を通したターゲット生徒の様子

参与観察とアンケート調査の結果を元に、ターゲット生徒を抽出し、授業内における観察を行った。ターゲット生徒は文化的階層が下位の生徒の中から抽出した。図3は、以降で取り上げる特に特徴のある生徒を

- ・自ら他者と関わりに行くかどうか

・周りの生徒からどの程度関わりがあるかの2軸で概念的に整理したものである。また、数学が得意かどうかを円の大きさを示している。



※円の大きさは、大きいほど数学が得意であることを示している

図3 ターゲット生徒の特徴

3.3.(1) 生徒Aの様子

生徒A…文化的階層得点7点、学習意欲得点13点、関わり得点10点

数学は苦手な様子で、グループワーク、ペアトーク等の話し合い活動の場では、自ら進んで話し合いに参加しようとする様子はあまり見られなかった。しかし学習意欲は高く、班員の話し合いをしっかりと聞き、それを元にまた自ら考え、課題に一生懸命取り組んでいる姿を見ることができた。

また、グループ内の生徒がAのことを良く気にかけており、時々声掛けをしたり、一緒に課題に取り組もうとする姿を見ることができた。時には、班員である数学が得意な生徒が、Aが理解できるまで教えていることもあった。

3.3.(2) 生徒Bの様子

生徒B…文化的階層得点8点、関わり得点5点

文化階層得点は8点だが、教師からの聞き取り等によりターゲット生徒の一員とした。また、学習意欲は無回答があったため点数は

出せないが、授業観察等から低いと予想される。

数学は苦手なようで、基礎的な知識も身につけていらず、授業観察を始めたばかりの頃は、教科書を開くのみで板書をノートに写そうとする等の行動は見られなかったが、観察後半にはノートを取ることが増えていった。

ペアトークでは、ペアになった生徒と話すことはなく、相手生徒の声掛けにも無反応であった。

グループワークの際も、Bが自ら話し合いに参加するようなことはなく、一言も発しないこともあった。しかし、グループ内の生徒はBのこともグループの一員として受け入れており、「解けた?」「どう考えた?」と話しかける姿を見ることができた。しかし、それに対してもBは反応しないか、首を振る程度であった。

しかし、観察を通して一度だけ、グループワークの際Bが何かひらめき、かつ、それに自信があったのか、「わかった」とグループに共有する姿を見ることができた。

その日の授業内容は、多角形の内角の和を、その多角形を三角形に分割することによって求めるものだった。生徒達は多角形をどのように分割して内角の和を求めるか、グループワークで取り組んでいた。その際、Bは班内で唯一、正解ではないがそれに近い分け方ができていた。しかし、いつも通り自ら共有したり、グループで話し合ったりする姿は見られなかったため、Bに対し「正解ではないけど近い分け方ができているよ、一度班の人に共有してみたらどうかな?」と筆者は提案したが、Bは共有することなく、黙ったままだった。教科担任も、机間巡視の際にBの考えに触れ、グループに共有するための支援を行っていた。すると、それからまたさらに時間はかかったが、Bが「わかった」と言って共有する姿を見ることができた。

彼のこのような姿は観察を行う中でこの時だけであった。教師のBへの働きかけがきっかけのひとつになったのではないかと考える。

3.3.(3) 生徒 C の様子

生徒 C…文化的階層得点 6 点、学習意欲得点 16 点、関わり得点 10 点

数学は得意な様子で、授業にとっても意欲的に参加している。グループワークの際には、班内で一番に問題を解き、それで終わることなく、どのように解いたのかを班員に教えている姿を見ることができた。また、グループワークの際に班員に役割を分担し、それぞれが解いた後にまとめる役目を果たしているなど、班のリーダーとして班員と協力して課題に取り組んでいる姿を見ることができた。

3.3.(4) 生徒 D の様子

生徒 D…文化的階層得点 5 点、学習意欲得点 10 点、関わり得点 6 点

数学は苦手なようで、基礎的な知識も身につけておらず、普段の授業も教科書やノートは開くが、板書をノートに写すことはほとんどなかった。

グループワークでは、自ら進んで話し合い活動を行う様子は見られなかった。

しかし、生徒 B と異なる点は、班員が D のことを全く気にかけている様子がなかったことである。B はグループワーク中、何か考えようとノートやプリントに向かっている姿は見られるが、解くことはできず、また、班員に尋ねることもできず、孤立していた。

3.3.(5) 生徒 E の様子

生徒 E…文化的階層得点 5 点、学習意欲得点 15 点、関わり得点 6 点

数学は得意な様子で、授業中に問題が解けず困っているような場面は見られなかった。グループワークでは、E 以外の班員も同じく数学が得意な生徒であり、課題をクラス内で一番に解き終わるような時もあった。しかし、その後「他の解き方もあるから考えてみよう」と筆者は声掛けを行ったが取り組む様子はなく、最初に求めた解き方のみでグループワークは終わってしまった。

3.3.(6) まとめと考察：授業におけるターゲット生徒の様子

アンケート結果を見ると、文化的階層が下位の場合、学習意欲得点、関わり得点が中位、上位に比べて低くなるが、観察を通して、文化的階層が下位な生徒が全員学習に向かうことが困難という訳ではなかった。生徒 B や D も、授業中に寝てしまうなどの行動をするのではなく、教師の説明を聞く姿勢はしっかりとできていた。これは、教科担任や、学年としての取り組み等により、この学年、クラスの学習規律がとても整えられており、授業に向かうことが当たり前となっているという前提が存在するため、学習意欲が低くとも授業に向かうことができているのではないかと考えた。

また、数学が苦手な生徒でも、自ら班員に尋ねることができたり、もしくは、班員がその生徒を気にかけて声掛けを行っている、その生徒は孤立することなく、問題に取り組もうとする姿を見ることができた。加えて、その問題の解答について少しでも自信があった場合、断片的にでもグループワークに自ら参加することができることが B の姿から見てとることができた。しかし、これは B の周りに気にかけてくれる生徒がおり、孤立していなかったために、何か分かった際に共有することができた上に、班員もそれに反応してくれたのではないかと考える。

B と比較して、D はわからないことがあっても自ら尋ねることはできず、また、班員も D のことを気にかけていないため、D は孤立してしまっていた。そうすると、例え何かわかったとしても、班員に自ら共有しようとしたことが難しくなってしまう、グループワーク等の際に課題に取り組むことが難しくなってしまう。普段の授業の中でも、わからない問題があっても近くのクラスメイトに尋ねることができず、かつ D がわからず困っていることを周りのクラスメイトが気付くことができないため、気にかけてくれるクラスメイトもできず、D は授業にますますついていくことが難しくなってしまうことが考えられる。

また、Cのように数学が得意で、班員と協同しながらの課題解決にも積極的な生徒がいる一方、Eのように他者との関わりが少なく、課題解決への意欲も低い生徒がいることが見て取れた。Eは現在数学が得意であるため問題はないが、今後数学がわからなくなってきた際に、他者に聞きに行くなどのスキルが身についておらず、リカバリーが難しくなってしまう可能性があるのではないかと考えた。

3.4. 中位層上位層の数学が苦手な生徒の様子

観察を通して、数学が苦手な生徒は文化的階層が下位の生徒が多かった。しかし、全員がそうではなく、中位、上位層にも数学が苦手な生徒は存在する。

そこで、これまで文化的階層の下位層に着目して分析してきたが、中位、上位層も含めた数学が苦手な生徒全般について、共通することがあるのではないだろうかと考えた。

3.5. 生徒 F の様子

生徒 F…文化的階層得点 12 点、学習意欲得点 16 点、関わり得点 12 点

数学は苦手な様子で、基礎的な知識も追いついていない。しかし、わからない問題があれば挙手をして教師に質問したり、授業中の教師の問いかけにも一番に反応するなど、授業に積極的に参加している様子を多く見ることができた。

グループワークの際には、基礎的な知識が追いついていないため、グループ内で分担された役目を果たせないことが多く、見当違いな考え方をしていることも多々あった。しかし、それを班員に指摘されると、「わからない！教えて！」と元気に訊ねていた。また、例えば見当違いな考え方でも、解けたと感じると班員に主体的に共有していた。

班員は、Fの「わからないながら関わる」ということを認め、一緒に課題に取り組んでおり、Fが孤立していることはなかった。Fの見当違いな解答も否定することなく、Fがどのように考えてその解答をしたのかを理解しよう

としたり、間違っている箇所を指摘して一緒に課題に取り組んだり、Fの考えを元にしてグループでの考えに直したりといった関わりを見ることができた。

数学が苦手でも、学習意欲が高く、積極的に他者と関わりながら学習している生徒がいる。参与観察から、基礎的な知識が定着しているかどうかは授業に向かえるかどうかに影響を与えていると感じる場面はあった。しかし、それを「自ら関わりに行ける」「周りの生徒が気にかけて関わってくれる」ということにより克服できている生徒がいることを観察を通して知ることができた。

4. 総合考察

文化的階層と学習意欲、学習行動には関係があることは先行研究により示されており、本研究で行ったアンケートにおいても同様の結果を得ることができた。参与観察を通し、生徒一人ひとりを見ていくと、文化的階層が中位、上位の生徒と比べて、下位の生徒は学習に向かう際の障壁が多いと感じられた。また、数学が苦手な生徒は下位層に多いと思われる。しかし、中位、上位層にも数学が苦手な生徒はおり、その苦手を他者との関わりで克服しようとしている生徒がいる。また、この学びの際の他者との関わりはアンケート結果により文化的階層との相関があるが、点数の幅で見ると階層差は存在せず、階層に関わらず同程度得意な生徒、苦手な生徒が存在することがわかった。

また、グループワークの際には、以下のような教師による間接的な支援があった場合、数学が苦手な生徒でも学習に向かうきっかけになるとと思われる。

- 生徒が互いに相手を気にし合えるような関係がある
- そのための教師の全体支援がある
- グループの設定

普段から生徒同士の人間関係作りを促進さ

せたり、協同して課題に取り組むということを生徒と共通認識を持ったり、グループを設定するにはグループによって大きな差が生まれないようにしたりと、生徒同士の関わりを後押しするような教師の支援が重要であると考え。また、生徒 B のように、直接的な支援を行うことで、生徒間の関わりを促すきっかけ作りにもなることがある。

研究を通し、私は授業内での学びの仲間づくり、協同して学ぶということの意識づけが、文化的階層によって学習へ向かい辛くなっている生徒に重要なのではないかと考えた。学びの仲間を作ることで、学習に向き合う一歩となり、関わり合いを強化していくことで、わからない時は自ら聞ける、自ら聞けなくても気にかけてくれる仲間がいるという意識作りに繋がると考えた。また、教えるという経験を通して学習がより定着するといったようなグループ内での学びの向上が期待できるのではないだろうか。

本研究の知見は、先行研究の玉木 (2017) や平成 25・26 年度千葉県高等学校教科研究員研究報告書と一致するところがある。玉木 (2017) は学級経営及びクラスの人間関係の再編を念頭に置いた授業実践を行っており、教師の前向きな声掛けと、授業の中心に困難を抱えていると思われる生徒（この場合は発達障害の疑い）を置き、彼の成長をクラスの再編につなげようとしたことで、クラス全体に授業に対して積極的に取り組む空気感が生まれたとしている。平成 25・26 年度千葉県高等学校教科研究員研究報告書では、生徒同士で学び合う活動として、わからない時に生徒同士で聞き、教え合える時間を取り入れた「学び合い」「ペア学習」「3 人組学習」の 3 つの活動を取り入れた授業実践を行っている。それにより、授業に前向きに取り組む姿勢が育ち、授業全体の雰囲気が明るくなるような変化も見られたとしている。

本研究は、文化的階層に着目しており、その中でも、下位層で本人の行動、努力では解決することのできない背景により学ぶことに向か

うことが困難であったり、意欲を失ってしまったと思われる生徒を想定している。しかし、本研究で検討した学習の際の他者との関わりは、個人の主体的な行動のみでは効果が薄く、クラスメイトやグループワークの際のメンバーなどの行動も重要である。対象生徒が孤立することなく、周りの生徒が気にかけてあげたり、声をかけてあげる等、共に学ぶという意識が大切ではないかと考える。

5. 参考文献

- ・麻生真緒 (2020) 「学習の困難さに関する家庭の文化的背景という観点からの検討 - 中学校数学科における授業内の手立てに着目して -」 令和元年度教育実践研究報告書
- ・千葉県教育委員会 (2013,2014) 「学び合う活動を取り入れた授業実践とその考察 - 生徒同士の自然な言語活動の探究を求めて -」平成 25・26 年度千葉県高等学校教科研究員研究報告書 (<https://www.chiba-c.ed.jp/shidou/k-kenkyu/>) (閲覧日:2021 年 1 月 26 日)
- ・荻谷剛彦 (2008) 「学力と階層」 朝日新聞出版
- ・志水宏吉 (2010) 全国学力・学習状況調査の分析・活用の推進に関する専門家検討会議 (第 17 回) 配付資料 2-6「平成 20 年度追加分析(お茶の水女子大学委託研究)社会関係資本と学力」
- ・玉木博章 (2017) 「高校での英語の授業を通じた人間関係の再編と学級経営に関する研究(1) -発達障害の疑いのある生徒を中心に据えた実践を例にして-」 瀬木学園紀要 (11) 83-91

謝辞

本研究を行うにあたって、温かくご指導くださった連携協力校の先生方、教職大学院の先生方に深く御礼申し上げます。